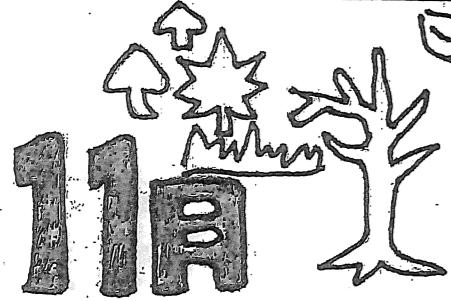


月刊 利根日石新聞

第000134号
発行 利根日石株式会社 TEL:0278-24-1635
本社販売管理課 FAX:0278-23-7980



寒い冬が近く来ています。今年も雪がたくは降るのか心配です。スキー場は雪がないと大変だし道は雪があると車の運転は慎重にと思えばスピードは出せません。この向反対車線が渋滞して車が20台以上止まっている間から車がさっさと出て来たので私は今更アクションを鳴らした事がなくて運転を始め何十年も立ちますがおおいまじりヒビヒビアクションを鳴らしてブレーキを踏みました。食料品を買物カゴに入れ後ろの座席に置いてあったものがすべて下にころがってしまいました。もう必死にたまたまなくてよかったです。同時に右も左も見ずに出てくるのが夕方の6時でライトはもちろん点灯してたので来ているのがわかるでしょう。うっかりは絶対にダメです。暗くなるほど昼間している人が見えにくいので遠くに見える人が変えて運転をします。私はいつも通っている道で大丈夫とは思わず安全運転第一です。一人一人の命。自分の命。これも大切です。

これまで人に感染するコロナウイルスは7種類了「重症呼吸器症候群SARS」「中東呼吸器症候群MERS」そして新型コロナウイルス他4種類は一般の風邪が原因で多くは軽症のようす免疫力のかわる抵抗力が私たちの元気を支えています。抵抗力が落ちると疲れたと感じたり風邪をひいたり皮膚炎、口内炎などが起ってしまうのでコロナに負けない免疫力を

- 免疫力アップ食材編 ベスト10
1位 ヨーグルト
2位 みかん
3位 バナナ
4位 にんじんジュース
5位 緑茶
6位 キシ柿
7位 キムチ
8位 納豆
9位 キウイフルーツ
10位 アーモンド

ある本を読んでNEXT IX「両親の感謝」2020 11月
「野球の千葉ロッテマリーンズ 和田選手は育成選手に入団しました。〈知識が許さないと〉練習で自ら追い込み、ラストまでの年々決めた本年六月、その努力と実力が認められ、支配下選手料を取ったのです。和田選手は、7年の影響から高校時代は野球部には所属せず、ラグビーに所属して自身を磨きました。卒業後は、日本の独立リーグを経由して入団という異色の経歴を持ち、「何れも心が折れぬように」と回想しています。

実家に帰った際も、「もうだめかもしない」と母親に弱音を吐きました。厳しい叱咤と覚悟していましたが「中途半端にやらぬように、悔いの残らないように」とエールを贈られ、母親の優しさを感じました。和田選手は育ててくれた両親への感謝を感じることで「誰かが自分を認めている」と思いが込められた一軍での選手生活をスタートさせたのです。

職場においても先輩や同僚として両親や家族が自身を守ってくれていることのエールを感じながら自己の成長の壁を打ち破っていきたいものです。感謝を自らの力に変えましょう。

両親と言えば、産んでくれて育ててくれて、相談にのってくれて、困った時は助けてくれて、感謝することが沢山あったのに、言葉で伝える事が出来ず……。これからは言葉で伝えられぬ分、感謝を自らの力に変えて色々な事に頑張っていくかと思えました。

第5回 日本語大賞 文部科学大臣賞
千葉県 富津市立富津小学校4年
森田 悠生 さん

「ぼくがいるよ」

お母さんが帰ってくる！ 1ヶ月近く入院生活を送っていたお母さんが戻ってくる。お母さんが退院する日、ぼくは友達と遊ぶ約束もせず、寄り道もしないでいちもくさんに帰宅した。久しぶりに会うお母さんとたくさん話しかけた。話したいことは沢山あるんだ。帰宅すると、台所から香ばしいにおいがしてきた。ぼくの大好きなホットケーキのほちみつがけだ。台所にはお母さんが立っていた。少しさせたようだけど、思っていたよりも元気そう。ぼくはとりあえず安心した。「おかえり」いつものお母さんの声がその日だけは特別に聞こえた。そして、ほちみつがけたっぷりかかったホットケーキがとてもおいしかった。お母さんが入院する前と同じ日常がぼくの家にもどってきた。

お母さんの様子が以前とちがうことに気が付いたのはお母さんから数日経ってからのことだ。みそ汁の味が急にこくなったり、そうではなかったりしたのでぼくは何気なく「なんだか最近、みそ汁の味がへん」と言ってしまった。するとお母さんはとても困った顔をした。「実はね、手術をしてから味と匂いが全くないの。だから、料理の味付けができていなくなっちゃって...」お母さんは深いため息をついた。そう言われてみると最近のお母さんはあまり食事をしなくなった。作るおかずも特別な味付けが必要なものばかりだ。

しだいにお母さんの手作りの料理が姿を消していった。かわりに近くのスーパーのお惣菜が食卓に並びようになった。そんな状況を見てぼくは1つの提案を思いついた。ぼくは料理が出来ないけれど、お母さんの味は覚えている。だから、料理はお母さんがして味付けはぼくがする。共同で料理を作ることを思いついた。

「ぼくが味付けをするから、一緒に料理を作ろうよ。」ぼくからの提案にお母さんは少しおどろいていたけど、すぐに賛成してくれた。「では、ぶりの照り焼きに挑戦してみようか」お母さんが言った。ぶりの照り焼きは家族の好物だ。フライパンで皮がパリッとするとまでぶりを焼く。その後、レシビ通りに作ったタレを混ぜる。そこまではお母さんの仕事。タレを煮詰めて家族が好きな味に仕上げるのがぼくの仕事。だいぶ照りが出てきたところでタレの味を確かめる。「いつもの味だ。」ぼくがそう言うと久しぶりにお母さんに笑顔が戻った。その日からお母さんとぼくの共同作業が始まった。お父さんも時々加わった。ぼくは朝、1時間早起きして一緒に食事を作るようになった。

お母さんは家族をあまり頼りにしないで一人でなんでもやってしまう。でもね、お母さん、ぼくがいるよ。ぼくはお母さんが思っているよりもずっとしっかりしている。だからぼくにもっと頼ってもいいよ。ぼくがいるよ。いつか、お母さんの病気が治ることを祈りながら心の中でそうくり返した。

たまにこの受賞作を目にして、目頭が熱くなりました。まさかコロナ禍でのお話かと思いましたが、調べてみると7年前に書かれたものでした。いつの世も子どものますぐさ、直向きな姿は変わりません。作品に失礼のないよう、すこく丁寧に書きました。;